

軍事・歴史・政治・経済研究紙

MONTHLY DAITOH-NEWS

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

民主主義を台頭にする国際政治

逆に、こうした世界の現実を裏側から透視すれば、国際的な世界戦略(Strategy)というものは、聖書や古蘭を理解する人達の合意によって進められ、国際政治の最重要課題は、ここに焦点が当てられているといっても過言ではない。

その意味からすれば、中東という地域は日本人が安易に考える石油の供給基地ではなく、宗教的並びに哲学的な基盤をなす、世界に強烈な影響を与える政治的な国家や、民族が錯綜する紛争の火種となりうる場所なのである。こうした国際政治の重要拠点の、日本の政治家は殆ど理解していないのである。

近代における日本人は、明治維新以来、西洋の科学合理主義にあまりにも魅せられた。

その結果、科学技術によって、何でもできると思いついて来た。しかし太陽系の、地球生命体の上に住む、生物の一種である人類は、宇宙の法則から何一つ制約を受けないで済むものはない。

今こそ、謙虚な心に立ち返り、自然や宇宙の秩序を正しく理解しなければならぬ。宇宙の摂理に従った人類の未来像こそ、人類共通のテーマである。

そして、人間自身が生まれながらに持っている能力を自然の中で生かす事こそ、現代に求められている急務の課題である。

たとえば、医療現場での病気の療は「医師が治す治療」ではなく、自然治癒力によって「自然と治る力」に任せる、自然治癒力を働かせるものでなければならぬ。しかし現代人は合理的な科学技術によって、先端医療に頼るあまり、自然治癒力を自ら放棄した。

今、地球生命体もその自然治癒力を失い始めている。果たして地球生命体は、自然治癒力を回復するだろうか。

人間の需める、便利さと豊かさ、快適さだけの都合を優先する開発の時代は終焉を迎えた。そして

人間も動物も植物も共生しなければならぬ時代がやってきている。大自然の秩序と、生命体の順環を生かす事こそ、これからの人類に課せられた命題である。

大自然の秩序に従うならば、夏は夏らしく、冬は冬らしく、自然のリズムに従って生きる事を、現代人は回帰の目標に定めなければならない。

要するに、「運が良い」というこの状態は、人為や作為を捨てて、自然のリズムに則り、その順環の法則に従って生きる事なのである。いま資本主義の枠組みが変わるうとしていく。近代資本主義は資源の収奪、階級対立闘争の末、物欲崇拜主義で金銭至上主義を展開させてきた。

ところが近年に至って、新たな時代の要求に応じ、政治、経済、金融、軍事の理念が根本的に変わろうとしている。

これまで近代資本主義と結びついた民主主義は、この社会システム自体が完成されたものでなかった。この未完成な民主主義の基盤に立つて、人々は自分達の暮しが不安定の上に築かれていた事を感じ始めた。そして不安定要素は、政治が解決してくれるわけでもなく、経済がそれを救ってくれるわけでもない。また勿論、小さな個人の力でそれが片付けられるわけでもない。これまで物質文明という、科学と技術の結晶は、人類に便利で豊かで快適な生活をもたらした。しかし科学や技術はあくまでも道具に過ぎない。便利で豊かで快適であるという事と、幸福と明とは別問題である。これを混同してはならぬのである。物質文明という道具は、あくまで道具に過ぎないのである。

こうした混同の結果、その誤謬がどのように人間の生活を歪め、多くの人間に不幸と貧弱をもたらしたか、現代人はこれについて考える事は殆ど無い。

中世以降、ルネサンス以来の近代史は資本主義社会の完成によって、精神的な進化は止めを刺された。これに準じて二十世紀初頭、共産主義が出現したが、それは模索の一つに過ぎず、試作の虚構理論であった。

一方、民主主義は老朽化して、多くの腐朽を現わし始めている。こうした時代、人々は「人生とは何か」という命題に対し、周期的な還元を再び求め始める。

いままさに、新しいシステムを

必要としている事は明白である。一つの文明が終わる、また新たな次の文明の転機を迎えようとしているのである。

いま世界と日本の間で何が起ころうとしているのか、その真相の本質を、人類の歴史の中から究明しなければならぬ。

議会制民主主義とは何か

民主主義は往々にして「愚昧政治」に陥りやすい。それは多数決原理と法政治主義を基盤にして、人民が権力を所有し、権力を自ら行使するという形式を取っている為である。したがってこの多数決原理は、時として「悪の多数決」になりやすい。その愚は古代ギリシアの都市国家に始まり、近世に

至って、市民革命を起した欧米諸国に勃興した。日本も、第二次大戦の敗戦後これに習った。

さて「悪の多数決」とは、「小の虫を殺して、大の虫を生かす」社会構造と、被選挙人(被選挙権を持つ政治家)を選ばず、無知な者(一般大衆)が教養が低く、無知な政治家は、必ずしも政治家として相応しい人物とは限らないから。今日に見る、政治家の汚職や腐敗は、こうした選挙人から選ばれた人達である。

そしてこれは愚昧政治と直結し、マスメディアなどに煽動されやすく、民主主義は「悪の多数決」になる恐れを十分に持っているのである。(独眼竜)

さて話しは少し異なるが、イスラエルとは「神と争う者」の意味である。

またイスラエルとは、「旧約聖書」に見えるヤコブと、その後裔たる十二部族の総称でもある。そしてその発生地は西アジアに属する。

イスラエル民族の起源は、パレスチナの南東方荒地に起り、前千数百年頃エジプトに居住した人々で、モーセによって導かれ、エジプトを出て、カナンの地に至り、前1250年頃サウルによってヘブライ王国が建設

された。前926年に北のイスラエル王国と南のユダ王国とに分裂した。

この後イスラエルは、前72

体験を経て、イスラエルの宗教はユダヤ教として発展する。

そしてシオニズム運動の結果、パレスチナに流入したユダヤ人が、一九四八年イギリスの委任統治終了とともに建設した共和国が、今日のイスラエルである。

しかしこの国家の存在は、中東紛争の中で焦点となっている。首都はエルサレムであるが、国際的には未承認であり、公用語はヘブライ語とアラビア語用いられているが、国家という線引きにおいて、不確実性の問題が多々提起されている。

さて「旧約聖書」の「ヨシヤア記」には、エリコ攻略戦の時の事が記されている。乳と蜜の流れるカナンの地は神がイスラエル人に約束した地だと言うので、ヨシヤアを指揮官に仰ぐイスラエル軍が攻略を始めた。イスラエル軍にはイスラエルの成人男子が全て参加しており、モーセの十戒の箱を担ぐ司祭達

先頭に立った。そこにスパイを放ってエリコを精察する。続く

郵便貯金が取り付け騒ぎを迎える日

国債発行残高は現在四五〇兆円である。

借金も見掛け上は、経済を大きく見せつけるから、経済活動にとってはプラスの面があると言いが、国や地方公共団体は明らかに借金のし過ぎである。ここで明確にしなければならぬ金銭哲学は、「経済」と「富」とは根本的に違うという事である。

「経済」は価値(紙幣あるいは貨幣の国民間流通)の流通で有り、「富」は価値の蓄積である。これが同じであるわけがなく、金銭哲学的に言くと、この違いは明確である。

一方、地元選出の国会議員は、愚かな子供騙しの選挙公約を掲げ、「豊かな郷土を作る」などと言って、お粗末な選挙戦を展開しているが、今日の日本の経済政策が無策ゆえに、被選挙人は国民に対し、心情的に訴え、これを票に繋げようとしているのである。

しかし一方において、「富」として蓄積された価値(貯金あるいは財産)を、他方が借りて使えば、経済は活性化するのは、価値の流通量が広がらないため、その規模は小さいものになり、今日のデフレ傾向は、借金が返済され、再投資に回らなくなった状態が起因しているのである。これは経済流通力と「富」が逆転して、価値の滞留が長期間続いていることを現している。

五倍近い国債発行数は、これを一般企業に置き換えれば、年商五倍の債務を抱えていることになり、こうして企業が、果たして生き残る事が出来るであろうか。

長引く不況下で税収が減る一方、増え続けるのは歳出を賄う国債(借金「赤字国債」)であり、以降、減少する兆しは全く見えてこない。

日本の国家予算はおよそ八〇兆円である。そのうち毎年三〇兆円が国債である。実に年収の五倍の借金を抱えていることになるのである。これに地方自治体の借金を加えると、およそ七六〇兆円借入が、今の国の台所事情であり、多くの場合、国がその償還や利払い保証、あるいは負担していると言った現実がある。

一般会計から特別会計へ繰り越されて、延期された隠れ借金は、年々積み上げて急上昇し、累積債務総額は、「借金の山」状態であり、これにぶら下がっているのが、旧国鉄の累積債務を引き継いだ国鉄清算事業団、郵便貯金や年金の預かり金を運用する住宅・都市整備公団、国民金融公庫などである。

そして最も恐ろしいのは、現実問題として増え続ける借金に対し、政府高官や官僚達は、これについて全く痛みを感じないという事である。

2年に、ユダは前五八六年に滅亡した。しかしバビロン捕囚の

2年に、ユダは前五八六年に滅亡した。しかしバビロン捕囚の

2年に、ユダは前五八六年に滅亡した。しかしバビロン捕囚の

2年に、ユダは前五八六年に滅亡した。しかしバビロン捕囚の



九州科学技術研究所 URL <http://www3.ocn.ne.jp/saigouha/>

世界恐慌の前触れ(86)

郵便貯金が取り付け騒ぎを迎える日

国債発行残高は現在四五〇兆円である。

借金も見掛け上は、経済を大きく見せつけるから、経済活動にとってはプラスの面があると言いが、国や地方公共団体は明らかに借金のし過ぎである。ここで明確にしなければならぬ金銭哲学は、「経済」と「富」とは根本的に違うという事である。

「経済」は価値(紙幣あるいは貨幣の国民間流通)の流通で有り、「富」は価値の蓄積である。これが同じであるわけがなく、金銭哲学的に言くと、この違いは明確である。

一方、地元選出の国会議員は、愚かな子供騙しの選挙公約を掲げ、「豊かな郷土を作る」などと言って、お粗末な選挙戦を展開しているが、今日の日本の経済政策が無策ゆえに、被選挙人は国民に対し、心情的に訴え、これを票に繋げようとしているのである。

しかし一方において、「富」として蓄積された価値(貯金あるいは財産)を、他方が借りて使えば、経済は活性化するのは、価値の流通量が広がらないため、その規模は小さいものになり、今日のデフレ傾向は、借金が返済され、再投資に回らなくなった状態が起因しているのである。これは経済流通力と「富」が逆転して、価値の滞留が長期間続いていることを現している。

五倍近い国債発行数は、これを一般企業に置き換えれば、年商五倍の債務を抱えていることになり、こうして企業が、果たして生き残る事が出来るであろうか。

長引く不況下で税収が減る一方、増え続けるのは歳出を賄う国債(借金「赤字国債」)であり、以降、減少する兆しは全く見えてこない。

日本の国家予算はおよそ八〇兆円である。そのうち毎年三〇兆円が国債である。実に年収の五倍の借金を抱えていることになるのである。これに地方自治体の借金を加えると、およそ七六〇兆円借入が、今の国の台所事情であり、多くの場合、国がその償還や利払い保証、あるいは負担していると言った現実がある。

一般会計から特別会計へ繰り越されて、延期された隠れ借金は、年々積み上げて急上昇し、累積債務総額は、「借金の山」状態であり、これにぶら下がっているのが、旧国鉄の累積債務を引き継いだ国鉄清算事業団、郵便貯金や年金の預かり金を運用する住宅・都市整備公団、国民金融公庫などである。

そして最も恐ろしいのは、現実問題として増え続ける借金に対し、政府高官や官僚達は、これについて全く痛みを感じないという事である。